

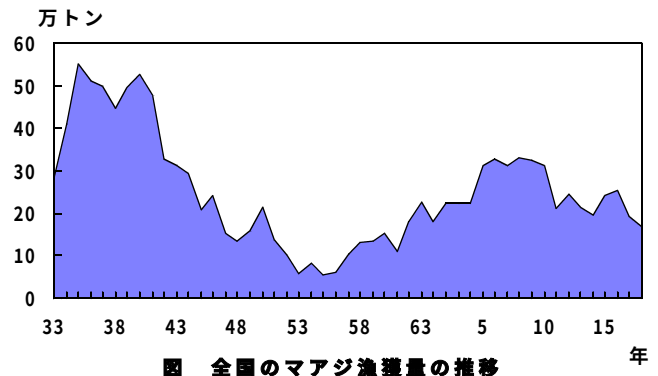
## 【漁況】

### 【マアジ】

#### 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トン进行ピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成18年は16万7千トンとなりました。



#### 2. 平成20年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、天草沖、甑島西、甑島東、串木野沖に漁場が形成されました。

薩南海域では、開聞沖、島間沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、マアジ豆（0歳魚：平成20年生まれ）、マアジ小（1歳魚：平成19年生まれ）、マアジ中（2歳魚以上）主体に476トンの水揚げで、前年の130%及び平年の103%でした。

#### 3. 平成21年1～3月期の見とおし

漁獲の主体は、マアジ豆（1歳魚：平成20年生まれ）及びマアジ小・中（2歳魚：平成19年生まれ）となるでしょう。

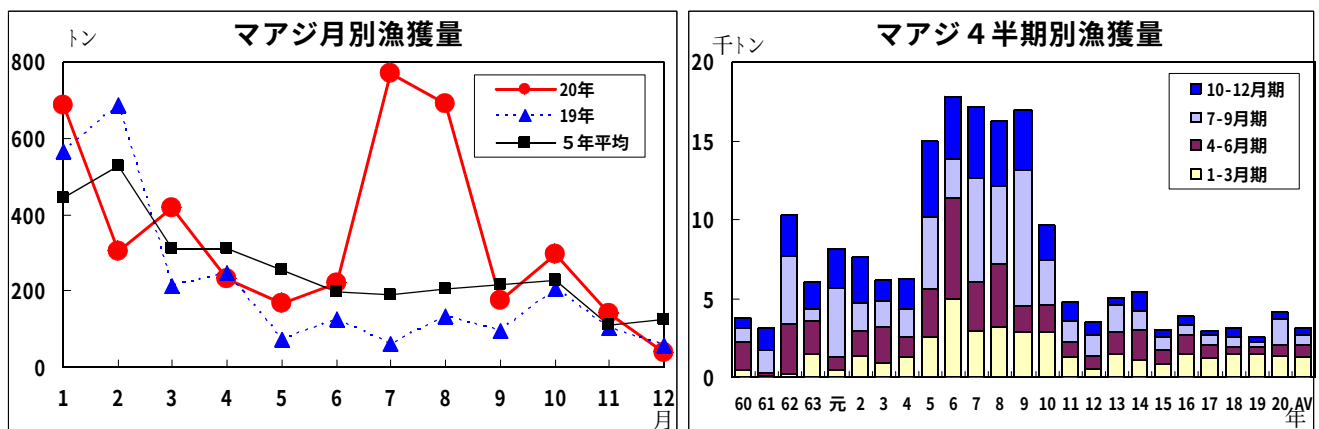
来遊量は、前年・平年を上回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

漁獲主体となるマアジ1歳魚は、現在までのまき網での漁獲状況から、前年・平年を上回ると考えられます。マアジ2歳魚は、現在までのまき網での漁獲状況から、前年を上回ると考えられます。マアジ3歳魚以上は、現在までのまき網での漁獲状況から、前年並みと考えられます。

総合的に判断すると、前年・平年を上回ると考えられます。

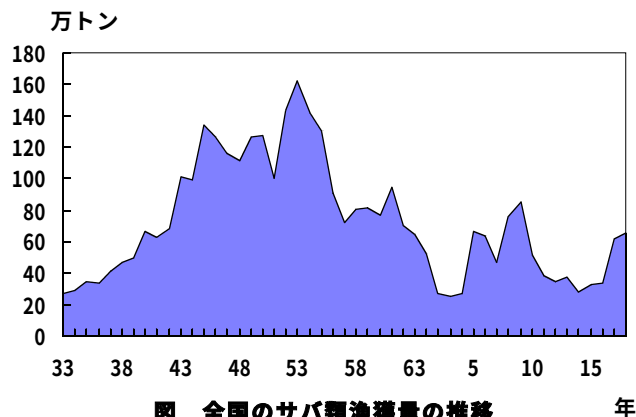


※平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値、12月は平成20年12月17日までの水揚げ量を使用。

## [サバ類]

### 1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成5年から増加に転じ平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、その後減少し平成14年は27万9千トンになりました。平成17年から再び増加し平成18年には65万2千トンとなりました。



### 2. 平成20年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、縄瀬沖、甌島東に漁場が形成されました。

薩南海域では、湯瀬、黒島沖、枕崎沖から坊津沖に漁場が形成されました。

4港計では、ゴマサバ豆（0・1歳魚：平成20年生まれ・平成19年生まれ）及びゴマサバ小（1歳魚：平成19年生まれ）主体に4,588トンの水揚げで、前年の170%及び平年の98%となりました。

### 3. 平成21年1～3月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ豆（1歳魚：平成20年生まれ）及びゴマサバ小（2歳魚：平成19年生まれ）となるでしょう。

来遊量は前年・平年並みになるでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

ゴマサバ1歳魚は、前期の後半漁獲の主体となったことから前年を上回る来遊が期待されます。ゴマサバ2歳魚は、現在の漁獲の主体となっていて、隣県においても同サイズが好調に漁獲されていることから、今後も前年・平年を上回る来遊があると考えられます。3歳魚以上は本来漁獲の主体となる期間ですが、資源評価結果から残存資源量がかなり少ないと判断されるため散発的な来遊になると考えられます。

総合的に判断して、前年・平年並みと考えられます。

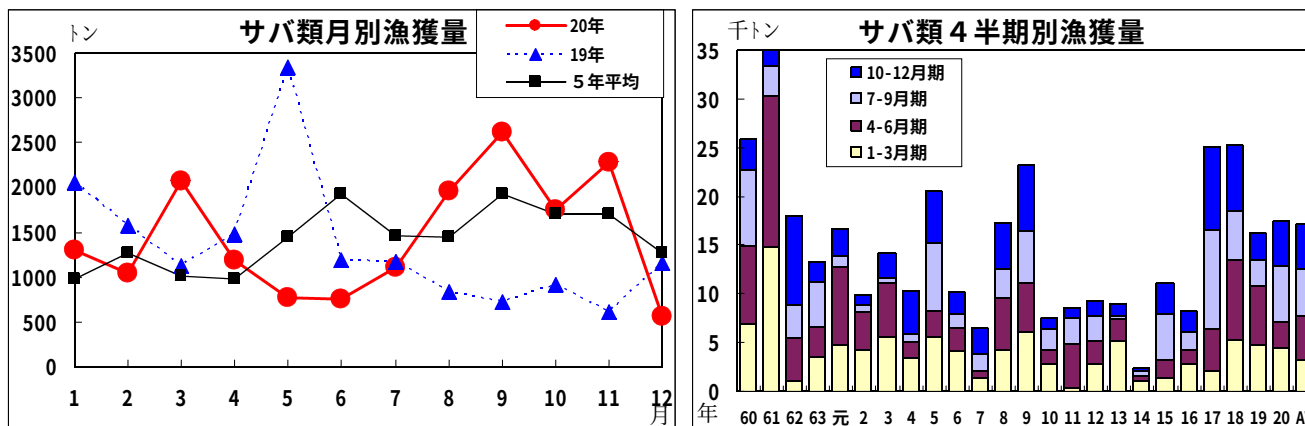


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値、12月は平成20年12月17日までの水揚量を使用。

## [マルアジ（アオアジ）]

### 1. 漁獲量の動向

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しました。平成16年以降は低調に推移し、19年は654トンとなりました。

### 2. 平成20年10～12月期の漁況の経過

まとまった漁獲はなく、期全体で11トンの水揚げで、前年の14%及び平年の3%でした。

### 3. 平成21年1～3月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ豆（1歳魚：平成20年生まれ）、マルアジ中・大（2歳魚以上）でしょう。

来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

マルアジ小（1歳魚）は、前期の漁況経過から、来遊量は前年・平年を下回る水準ですが、隣県でマアジ豆に多く混じっている状況があるため、海況によっては来遊することが期待される。マルアジ中・大（2歳魚以上）の来遊量は、前年・平年を下回る水準です。

総合的に判断して、前年・平年を下回ると考えられます。

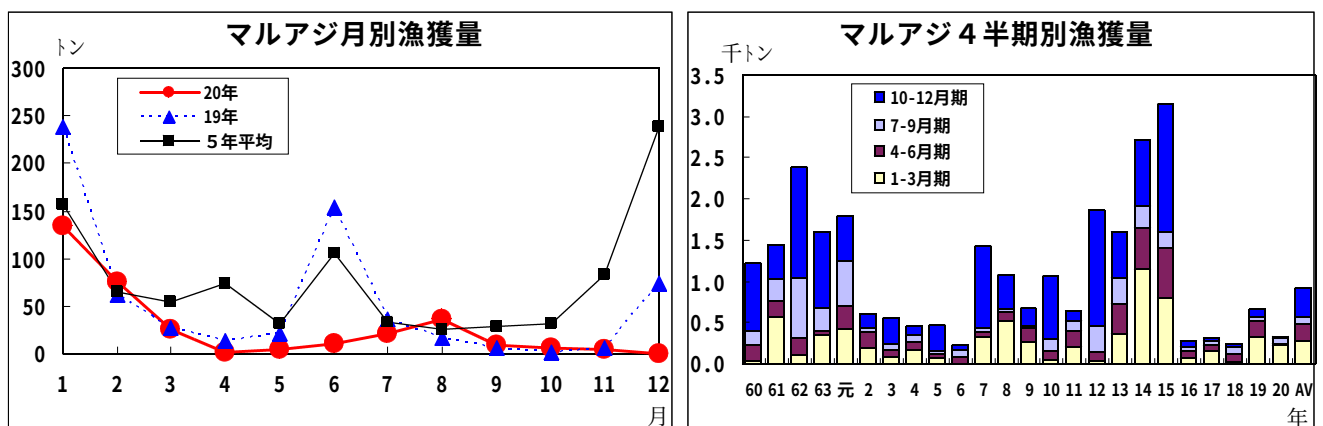


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化（4港計）

※ 平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値、12月は平成20年12月17日までの水揚げ量を使用。

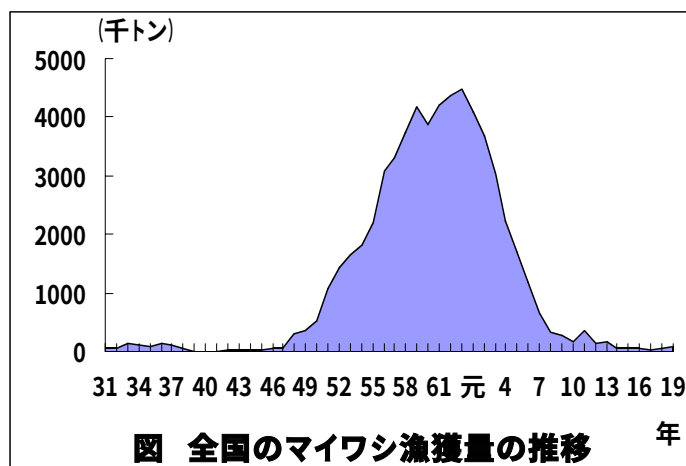
# [マイワシ]

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。

その後さらに減少し平成17年は2万8千トンとなりましたが、平成18年は5万3千トン、平成19年は7万9千トンと近年はわずかに増加傾向となっています。



## 2. 平成20年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

まとまった来遊は見られず、鹿児島県4港のまき網で22.5トン(前年比1%， 平年比7%)と前年・平年とも大きく下回りました。北薩海域の棒受網では0.4トン(前年比42%， 平年比187%)と、前年を下回ったものの平年を上回りました。

## 3. 平成21年1～3月期の見とおし

大羽銘柄(1歳魚・平成20年生まれ)が漁獲の主体となるでしょう。前年を上回り平年並みとなるでしょう。

(根 拠)

マイワシ資源は全国的に依然として低水準にあるものの、近隣県の水揚げ状況より資源状況は増加傾向にあり、低調だった前年を上回ると考えられます。

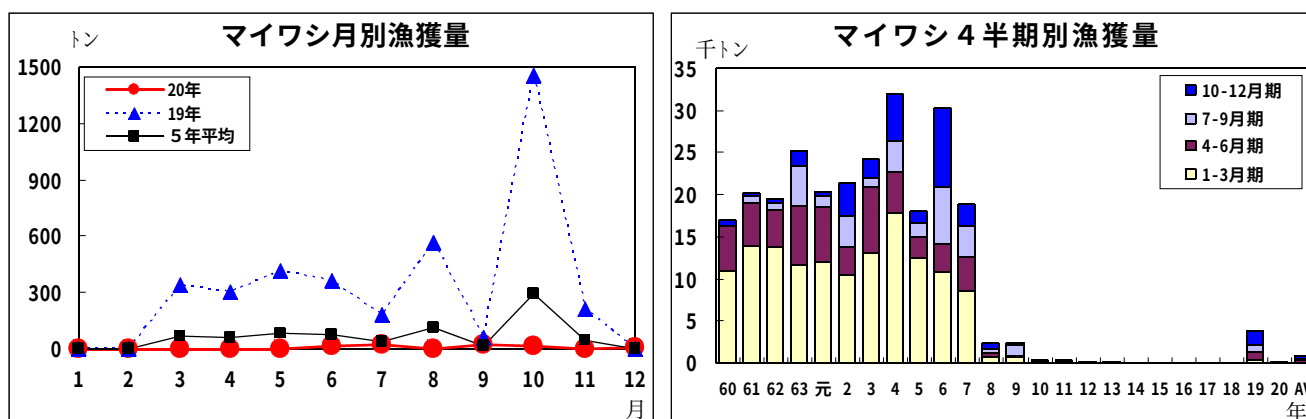


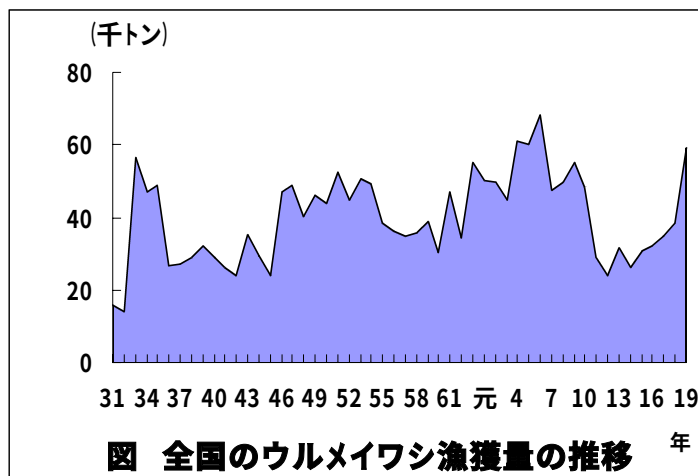
図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，平成20年12月17日までの水揚げ量を使用。

# [ウルメイワシ]

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりました。その後、増減を繰り返しながら増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。その後減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トンとなりましたが、近年は増加傾向となり、平成19年は5万9千トンでした。



## 2. 平成20年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

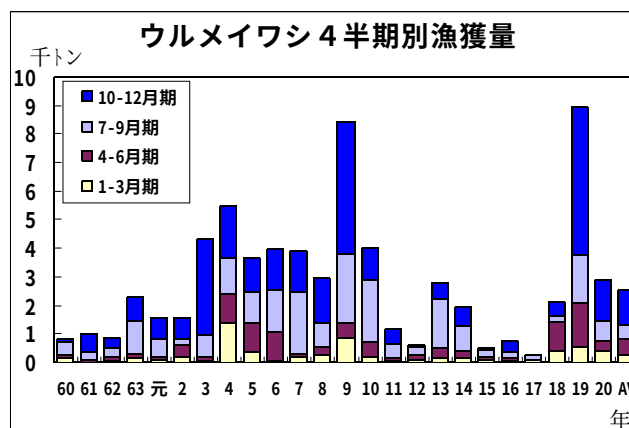
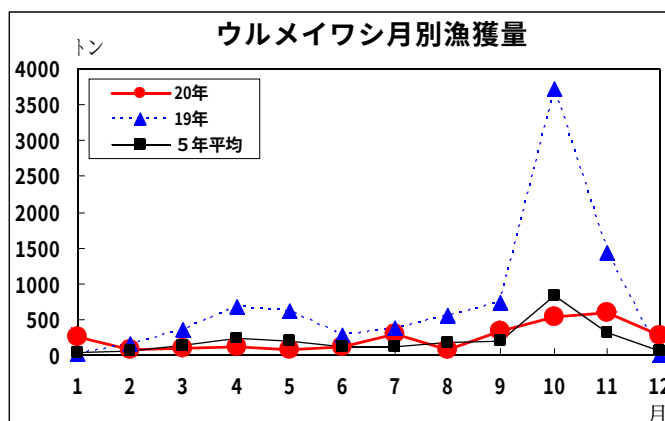
鹿児島県4港のまき網で1429.9トン(前年比28%，平年比118%)と、好調だった前年を大きく下回ったものの平年を上回りました。北薩海域の棒受網でも73.8トン(前年比83%，平年比281%)と、好調だった前年を下回ったものの平年を大きく上回りました。

## 3. 平成21年1～3月期の見とおし

大羽銘柄(1歳魚・平成20年生まれ)が漁獲の主体となるでしょう。前年を下回り平年並みに推移するでしょう。

(根 拠)

今期漁獲の主体となる1歳魚(平成20年生まれ)の10～12月期の近隣県の漁模様より、来遊水準は平年並みに推移すると考えられます。



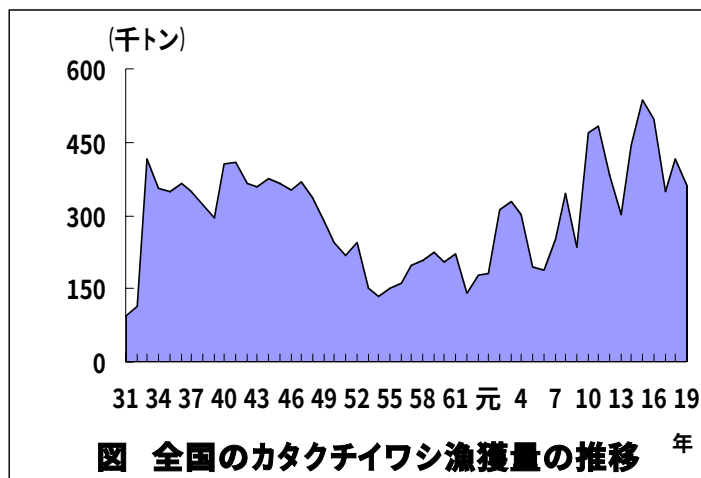
## 図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，平成20年12月17日までの水揚量を使用。

## 【カタクチイワシ】

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の51万7千トンとなりましたが、平成17年は34万7千トン大きく減少し、平成19年は41万6千トンとなりました。



## 2. 平成20年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

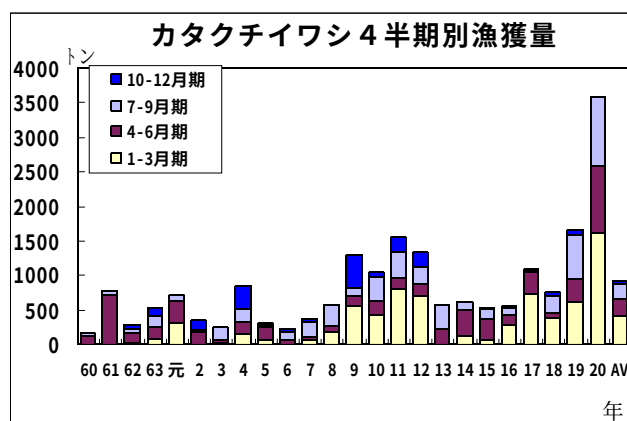
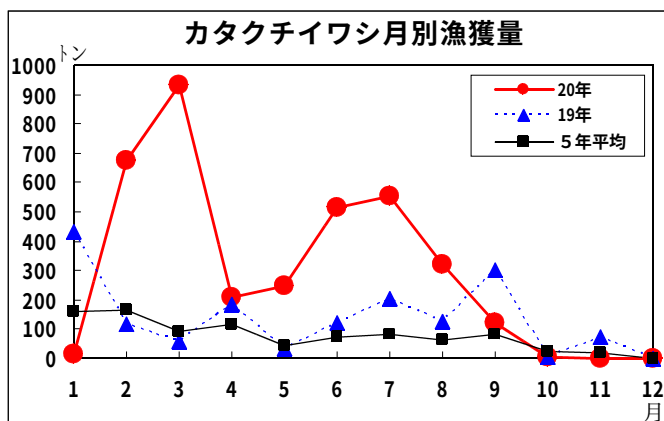
鹿児島県4港のまき網で3.7トン(前年比5%, 平年比9%)の水揚げで, 前年・平年とも大きく下回りました。北薩海域の棒受網では18.8トン(前年比128%, 平年比23%)の水揚げで, 低調だった前年を上回ったものの平年を大きく下回りました。

### 3. 平成21年1～3月期の見とおし

大羽銘柄(1歳魚・平成20年生まれ, 2歳魚・平成19年生まれ)が漁獲の主体となり, 前年・平年を下回るでしょう。

(根 拠)

1歳魚(平成20年生まれ)については本県のバッチ網の漁模様や近隣県での漁模様が低調に推移していることから来遊水準は低いと考えられます。また、2歳魚(平成19年生まれ)の来遊予測は現状では困難ですが、総体的に見て前年・平年を下回ると考えられます。



【図】 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値、平成20年12月17日までの水揚量を使用。



# [シラス]

## 1. 経年経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では平成11年の5,450トン进行ピークに減少傾向を示し、平成14, 15年と1,000トンを下回り低調に推移しました。その後平成16年は3,507トンと比較的好調に推移しましたが、平成17年以降減少傾向を示し、平成19年は2,470トンとなりました。

志布志湾海域では平成12年の1,407トン进行ピークに減少傾向を示し、平成14年は396トンまで減少しましたが、平成15年以降は増加傾向を示し、平成19年は2,374トンと好調に推移しました。

## 2. 平成20年10～11月期の漁況の経過

今期の西薩海域はカタクチシラス主体に159.9トンの水揚げで、前年の49%, 平年の27%と前年・平年を下回りました。志布志湾海域ではカタクチシラス主体に237.7トンの水揚げで、前年の40%, 平年の88%と前年・平年を下回りました。

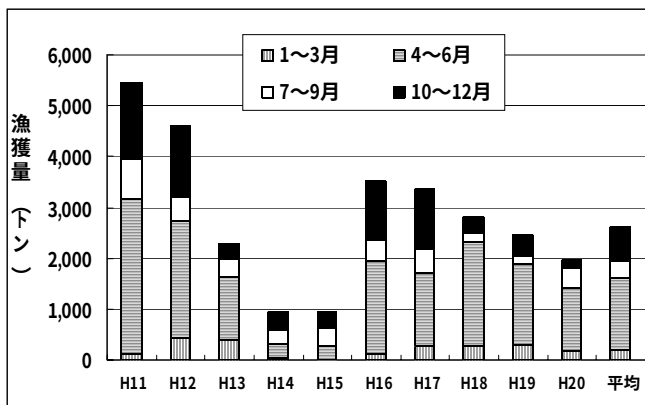
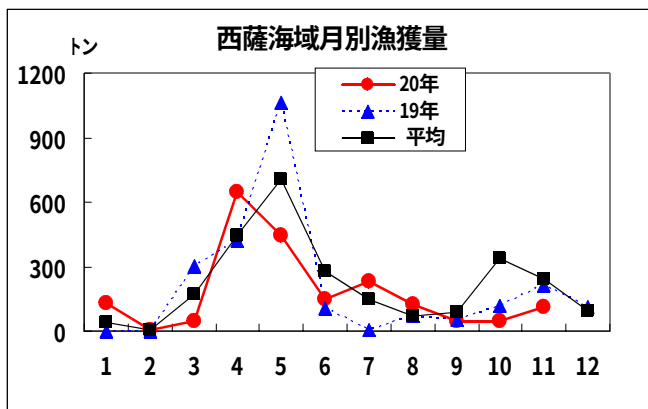


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4漁協計)

※平成20年11月末までの水揚げ量を使用。

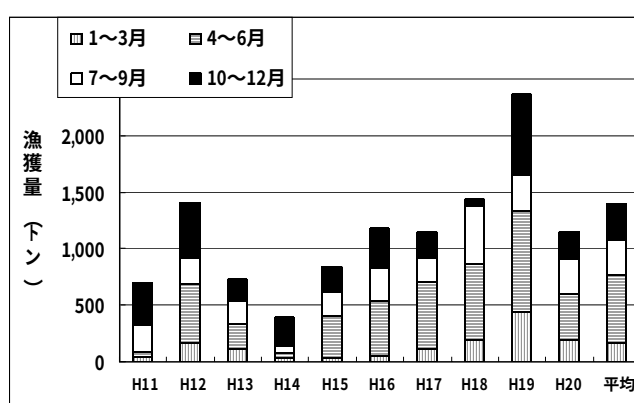
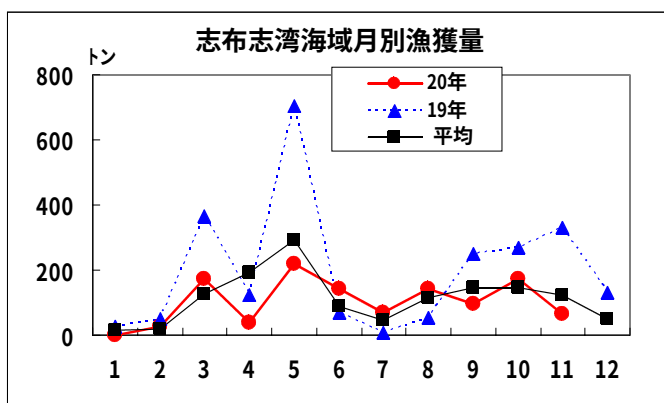


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2漁協計)

※平成20年11月末までの水揚げ量を使用。

## [イワシ類参考資料]

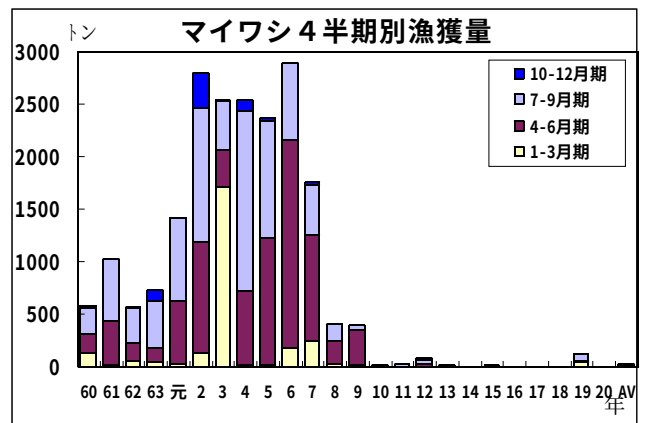
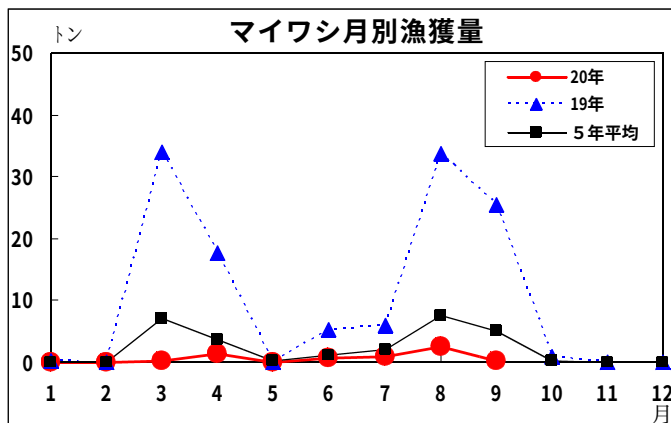


図 マイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

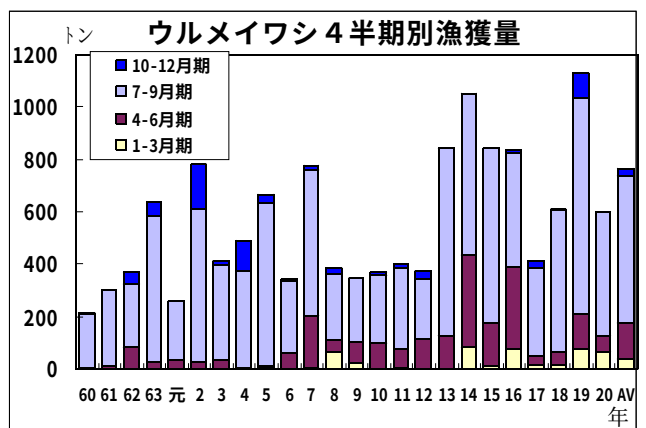
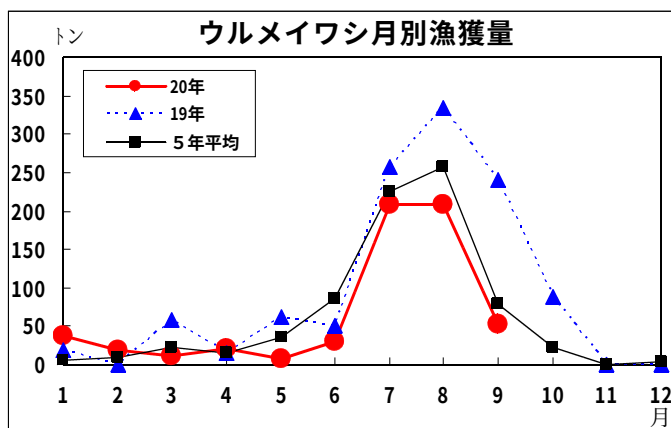


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

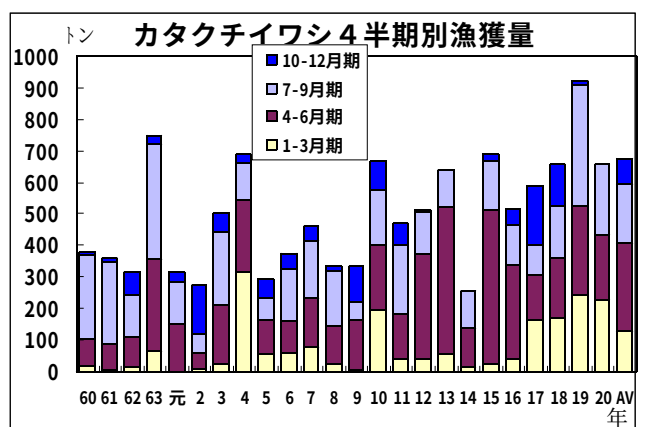
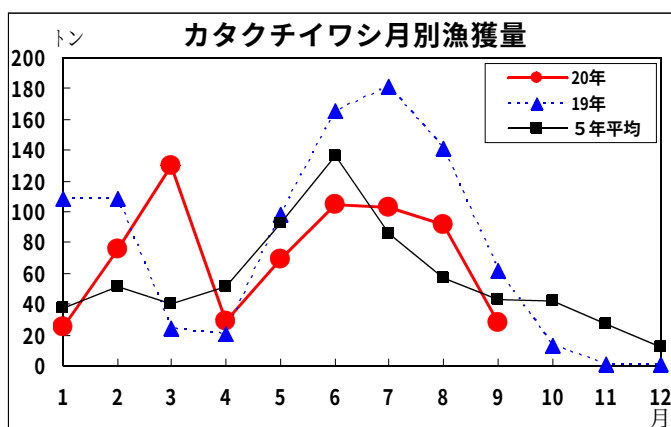


図 カタクチイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

※ 平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，9月は平成20年9月17日までの水揚量を使用。



## [参考：漁況経過のみ記載]

### 〈ムロアジ類（クサヤモロ、モロ）（4港計）〉

#### 1. 経年変化及び平成20年7～9月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トン进行ピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから4,500トンの間での推移となっています。平成19年は18年より若干増加し2,655トンとなりました。

平成20年10～12月は、薩南海域でクサヤモロ（銀ムロ）主体の漁獲があり、期全体では1,221トンの水揚げで、前年の66%及び平年の92%でした。

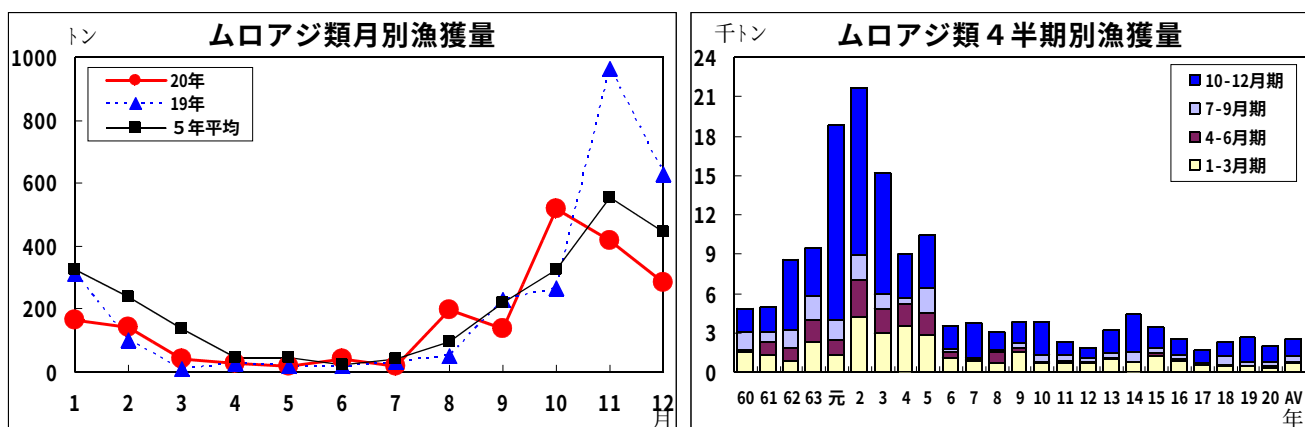


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値、12月は平成20年12月17日までの水揚量を使用。

### 〈オアカムロ（4港計）〉

#### 1. 経年変化及び平成20年7～9月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トン进行ピークに一端減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となり、平成19年は昭和60年以降最低の714トンとなりました。

平成20年10～12月は、主に薩南海域で漁獲があり、期全体では582トンの水揚げで前年の359%及び平年の167%でした。

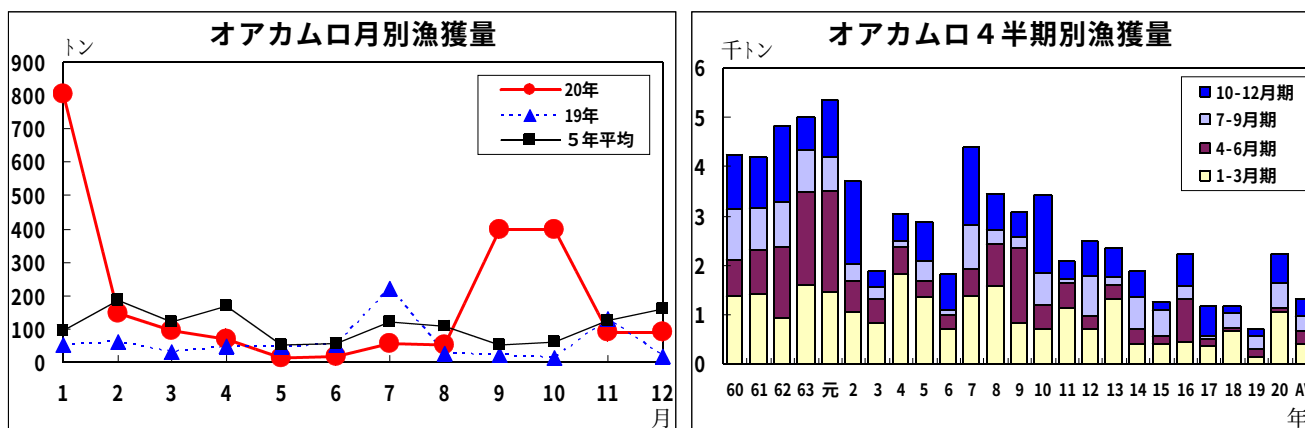


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値、12月は平成20年12月17日までの水揚量を使用。